

本誌・昨年号までに続いて、今回も、近年の外国での写真等を中心に紹介させていただきます。異例な版組みですが、今回のオマーンについては、その輝かしい歴史と人々、自然について、まず、30年前の小稿2頁をご覧ください。（次頁とも、古今書院の月刊『地理』1995.9月増刊『世界の山やま／アジア・アフリカ。オマーン編』長岡稿の転載。）

アラビア半島の変動帯

39 アフダル山脈 (オマーン)

アラビア半島中央部は、ルブ アル ハーリ（空白地帯の意）砂漠と呼ばれる広大な砂漠地帯が広がる（ただしオマーンでは砂地はほとんどなく、水がないだけの礫原が多いので礫漠といったほうが適切）。半島の西岸には、アフリカ大地溝帯と同じく、新生代第三紀以降に開き始めた紅海が広がっているが、この海岸方向（西）に向かって、アラビア橋状地を形成する古い安定地塊はきわめてなだらかに標高を上げて 3000 m 以上の山やまを連ねる山地となり、最後は比較的急傾斜で海岸に達する。半島南方のアデン湾でも同様である。一方、半島東部のオマーン湾岸には、対岸イランのザグロス山脈と同様に、中生代から新生代のアルプス造山運動による 3000 m 近い狭長な脊梁山脈が連なる。これらの山地では、南部を中心に夏の季節風が降雨をもたらし、緑豊かな風景となっている地もある。

現在のオマーンを中心とする地域は、BC 30 世紀ごろからマカンと呼ばれており、メソポタミアへの銅の供給および優秀な航海者の地として知られていた。銅精錬跡もあるが、精錬が行われてい



アフダル山脈を横断する谷の側面支谷。古い砦の背後は比高 2000 m の単斜構造の山。 長岡正利撮影 81. 秋



山岳地域の小集落での子供たち。長岡正利撮影 81. 秋

たとすると、当時のこの地方にはレバノン杉のような巨樹が茂っていたのかもしれない。

時代は降って、10 世紀にはオマーンは全イスラムにおける最も繁栄をきわめた港として知られた。この時期、オマーンの海上勢力は全インド洋の交



アフダル山脈中の小盆地。長岡正利撮影 82. 秋

易を支配し、そのダウ船は中国の広東にまで達した。

1498年のバスコ・ダ・ガマによる喜望峯廻りのインド航路の発見にもオマーン人が水先案内の役割を果たしたと言われている。しかし、それ以降のポルトガルの侵攻、ヨーロッパ諸国による東西交易の発達、さらにスエズ運河経由による蒸気船の運行によって、オマーンは閉鎖的な経済状態となった。なお、1970年以降は、現国王による治政下で内政・外交における改革が進められ、石油収入もあいまって近代的な国づくりが進んでいる。

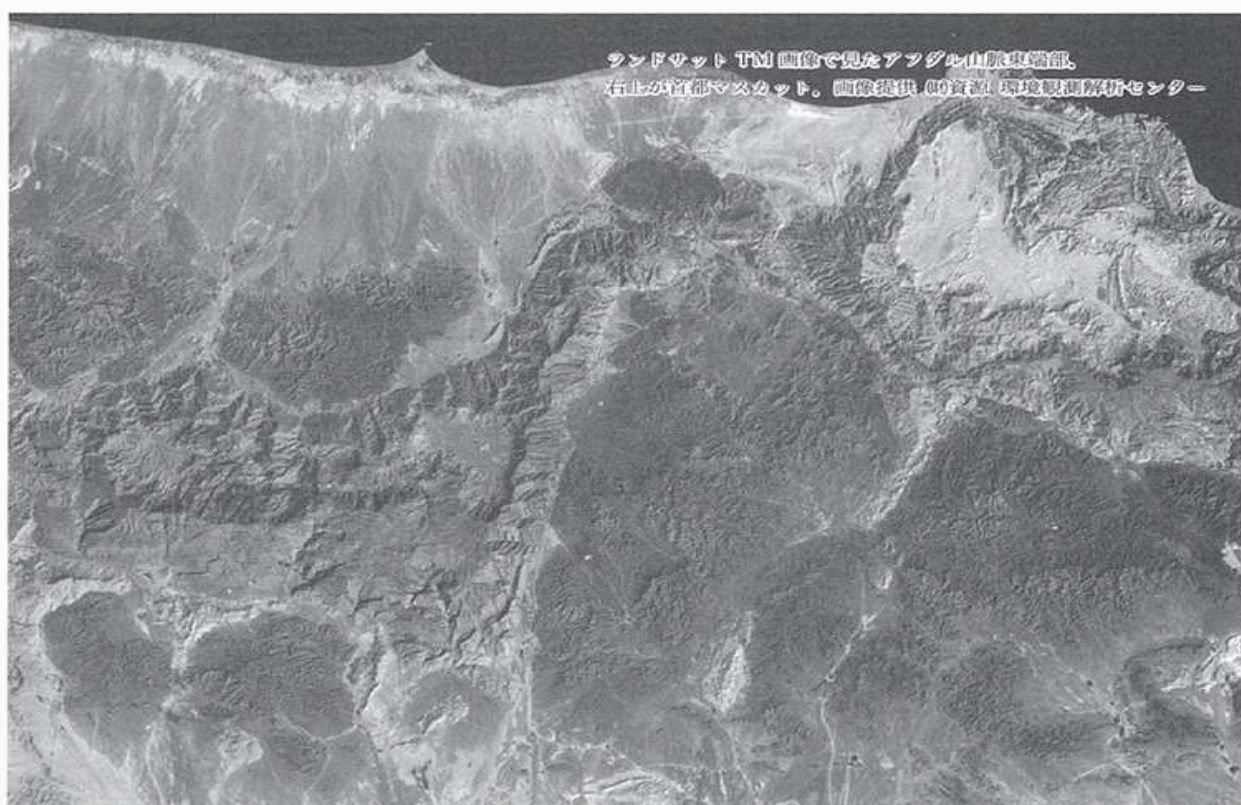
オマーンの気候は熱帯乾燥気候に属する。首都マスカットの冬は日本の晩夏程度だが、夏は最高気温が連日のように40度を超え、海に近いことから湿度も高く、日本人にとっては耐えがたい暑さとなる。年間降水量は100mm程度だが変動が激しく、年に数回はどこかで局地的な洪水被害が起きる。山岳地域では時には降雪もある。

オマーンを特徴づける地形は、北東側のオマーン湾沿いにゆるく湾曲してつらなる平野と、背後のアフダル山脈(またはオマーン山脈)、その内陸側に広がるルブ・アル・ハリー砂漠である。アフダル山脈の稜線部は、山脈を形成した背斜軸に一致しており、軸にそって鍋状の小盆地が点在する。

山脈中央部を構成するのは石灰岩を主とする古・中生層であり、見事な単斜構造をなしている。山脈の両側の広い地域は低い山地で、異地性のオフィオライト(かつて海洋性地殻を構成していた塩基性火成岩がプレート運動によって移動してきたもの)由来の礫が、強い陽射しに焼かれて鉄錆色の異様な色調となっている。

アフダル山脈の最高峰は標高2980mのジャバル・シャムス(太陽の峰の意;下写真の左下縁)であるが、この国の人びとにとっては登山対象とはなっていない。山脈の北から近づくのは、鍋状の盆地の急崖をはいあがることになるので容易でない。南からは緩傾斜の斜面をたどることができる。ただし、古くからの山越えの道のほかは、そもそも登山道などない。

近代化が急速にすすむ首都近郊とは対比的に、山間部では過疎化がすすんでいるが、今だに古いアラブの伝統と生活が残されている。山深い集落を訪れれば誰であれ、腰に剣を佩(はい)した長老から客人として遇される。まず甘味な干ナツメヤシ(デーツ)、次いでカルダモンの香り豊かな濃いアラブ風コーヒー、そして場合によっては食事と、アラブ・ホスピタリティといわれる古いアラブの美しい風習にふれることができる。(長岡正利)

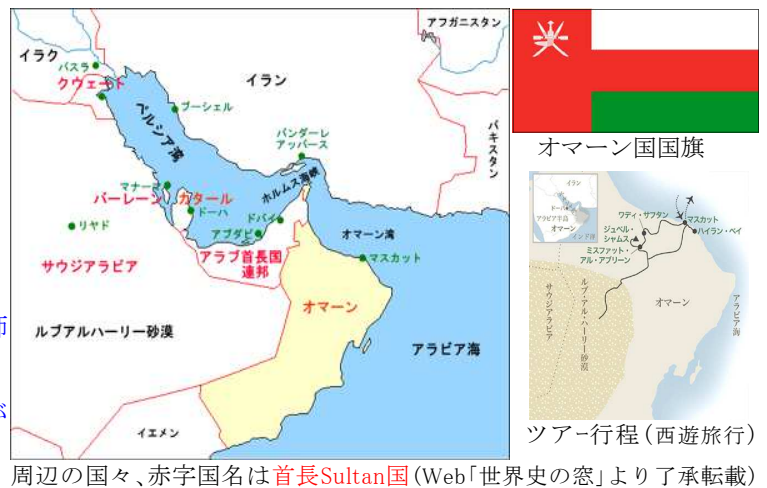


ランドサット TM 画像で見たアフダル山脈東端部。
右上が首都マスカット。画像提供: 財団法人 環境視察解析センター

40年程前(20歳台後半)に、JICA(当時、「国際協力事業団」)の仕事で、アラビア半島東端のオマーン国に5回行ったのですが、既に77歳となった小生、行けるうちに今一度、同国を見んものと、今年2月に40数年ぶりに出かけて来ました。当時は、国を開いて10年。新しい国王(スルタン)のもとで、明治の日本を想わせるような、気概に満ちた国でした。かつては、家長は腰に短剣を佩して颯爽と(3頁目に)。今、その様な姿の人を見かけることはさすがにありませんでした。その自然は、当時も今も、街を離れれば、どこまでも続く沙漠と、碧空の下、山々。大きな砂丘や山歩きもしつつ、彼の地の自然を堪能して参りました。

今回の旅は、「西遊旅行」社企画のツアーです。行程内容は、首都マスカット周辺と湾岸沿いに連なる山地。内陸沙漠です。地域の概況は、前2ページに述べたとおりですので、それをご覧頂けた前提で、以下、掲出写真に沿ってのご説明を。

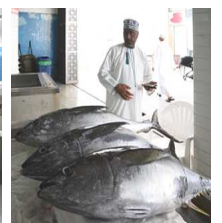
なお、これまでの小稿では、今回同様の連載について、副題に通し番号を附しておりました。2022年版では、「その14」として、ロシア・カムチャッカへのクルーズ 船添乗講師の旅。2023年版では番号無し2編でしたが、中国貴州省招待撮影行が「15」。北海道大地震関連のランタン谷行きが「16」。今回、本号のオマーンが「17」となります。



上写真は、オマーンの首都・マスカットMuscatに近い空港到着の直前。40数年前（以下、本稿では「昔」と表記）には砂礫原であった地が、見事な住宅地に変貌。国際空港から、旧王宮のあるマスカットとその手前の繁華街マトラMuttrahに至る前には、高貴な乳香Frankincenseを焚く香炉のような建造物なども。右上の2枚は、昔から既に4車線で、英国の保護国(同盟関係の)時代を想わせる、瀟洒な海岸通り。

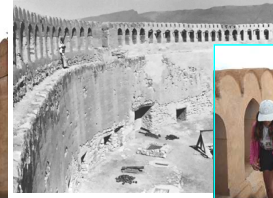


昔は、一旦入り込んでしまうと迷路であったマトラ・スーク(市場)は、整然と区画整理された市街地の市場となって、もう迷う心配はなく、賑やかな夜の街を人々がそぞろ歩き。中央上は昔(カブース国王時代；次ページ詳述)の王宮で、この一帯では威厳の中にも親しみの景観。右は、綺麗に公園化された現在。現・王宮のことは次ページで写真紹介しますが、今見えるのは道路沿いの、外壁のみ。



昔、マトラ海岸に放置されていた巨大なダウ船。当時聞いた話では、「200年前に、この船で渡洋航海して、米国へ大使を送った。」との由。17～19世紀にはインド洋全域を商圈とし、東アフリカ沿岸のザンジバルを勢力下に置いたオマーンのダウ船ですが、今は、観光船(右写真)としての活躍だけ。昔は、海岸には青銅製の大砲(大筒)が散乱。この沖で難破した交易船のもののか？ 昔(上中央写真)も今も、海産物は豊かで、見事なクロマグロも。かつては露天取引だったその地に、今は、大勢で賑わう立派な市場が完成。

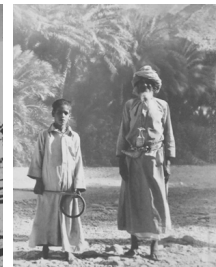




古都・ニズワの城塞と、昔の塔屋内部。今は観光客用の安全策が。

城塞入口の受付嬢

マスカットから南西170km程の古都・ニズワNizwa(かつてイマームが治め、スルタンとは対立)への経路上で。その西側には造山運動(プレート衝突)により隆起したハジャールHajar山脈(写真の辺りでは石灰岩)が続き、山麓には陽に焼けたオフィオライトが分布する。それは、上記プレート衝突に先立って、上部マントルが衝上してきたもの(サマイルナッペ Samail Nappe)である。山麓礫原には化石に見紛う石灰岩礫があるが、実は、夜の結露が礫表面を流下しつつ溶蝕した線状の跡。(私考、2万年程?かけて)



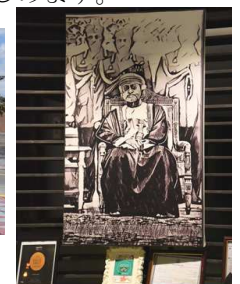
上写真は、昔のニズワ。前方に、上で紹介の城塞が。当時でも、腰に剣を佩する人は既に少数だった。山岳地域のミスファMisfat al-Abriyyinでのご夫婦。今は、この様な姿が普通で、多くはないが女性も普段から外出。聚落内のデーツ(ナツメ椰子)林には、灌漑用の水路Faraj(地下導水路もあり)がある。

上右写真は、最高峰 Jabal Shams(ca.3018m)を望見する展望地。翌日の雨で、登頂はならず。



上は、昔の沙漠の人で、目標地が見えなくとも確実に歩を。今はGPS車で。砂丘を廻り込んで、砂丘の間にテント泊。午後になると風が出て、細かな飛砂が。右は遙かな砂丘地への落日。気温は急に低下。

www.kinki.kuwv.org/glut/20240212 をご覧に。11期・加藤様制作による、砂丘からの全周眺望が愉しめます。



現王室所蔵の巨大外航船と、新王宮を囲む長大な堀。

1970年に即位し、国民に敬愛されつつ、オマーン国を繁栄に導いた国王(スルタン)カブース Qaboos bin Said 殿下でしたが、2020年1月に崩御(病没)なされた。左上写真がその若き日。(JICA調査団として拝領) かつての王宮は前ページ紹介のように広く公園化されて、国民の憩いの場に(左上写真)。現国王には、遺された遺言開封で、いとこのハイスムHaitham bin Tariq 氏が即位された。右上が現国王を描いたパネル(マトラヘル・フロントで)。右は、その禅譲図(想像図、同ホテルで。)

拙稿は、従来同様に、ご了解を頂いての、写真沢山で構成しております。写真は、Web 上で、各ページを A3 でご覧頂くことを前提の解像度です。40 数年を隔てての写真紹介が多く、説明が細分化されたことをお詫びします。

